

もの、ふの八十字治川のはしばしらのどかにおとせ楨の島舟

〔承久軍物語三〕同年六月三十二日の早朝より、かさねて官軍をまよはうにつかはさる、略○中う

ぢばしへは、さ、きの、中納言ありまさ卿略○中 えんいん法師をはじめとして、一万よきにてむ

かひける、略○中

繪所うぢばしをかき、はしいたはづし、川中らんぐいをうち、大づなを引、さかも木

〔吾妻鏡二十五〕承久三年六月十三日丙寅相州北條以下自野路相分子方々之道、相州先向勢多、

略○中 西刻略 中 武州北條陣于栗子山武藏前司義氏、駿河次郎泰村不相觸武州、向宇治橋邊始合

戰官軍發矢石如雨脚、東士多以中之籠平等院、及夜半、前武州以室伏六郎保信等進于武州陣云相

待曉天可遂合戰由存處、壯士等進先登之餘、已始矢合被殺戮者太多者、武州乍驚凌甚、雨向宇治訖、

此間又合戰、東士廿四人、忽被疵、官軍頻乘勝武州、尾藤左近將監景綱可止橋上戰之由、加制之間、各

退去、武州休息平等院、

〔勸仲記〕弘安六年二月十日乙未、左大將殿御直衣藤原兼忠八葉御車侍三人被召具、略○中 未刻著宇治橋被

用御輿、

〔興福寺略年代記〕德治二年十二月十二日、亥刻、爲學侶衆徒之沙汰、奉遷神木春日社於泉木津了、同

五日丑刻御入洛之處、曳宇治橋武士奉防御之、仍御止留平等院、

〔梅松論上〕去程に御手分あり、略○中 勢田は正月元年延元三日より矢合とぞ聞えし、將軍足利氏は日

原路を経て宇治へ御向あり、略○中 京方宇治の討手の大將義貞、橋の中二間引て、櫓揆楯を上て相

支けり、

〔太平記十七〕山門牒送南都事

宇治へハ中院中將定平ヲ被遣、宇治田原、醍醐、小栗栖、木津、梨間、市野邊山、城脇ノ者共、馳集テ二千